

焰肩仏を手がかりとして

高橋堯昭

この度寄しき因縁によって仏の背中から火が出、足元から水の流れ出る像、所謂「焰肩仏」(写真1、2参照)とか「双神変」(1)とか言

われる仏像が二体私のコレクションに加わった。私はこの珍しい仏像を手がかりとして、これらが形成される世界、ひいては大乗仏教の成立する社会的基盤を考えてみたい。

(83)



焰肩仏を手がかりとして (高橋)

(1) 焰肩仏 (双神変像)

AD3.4世紀 (筆者蔵)

〔註〕

(1) 双神変或は双対神は「仏本行集
經卷五三」「mahāvastu」に

◆
まず、写真2からはじめよう。こ
れは縦七十センチ横六十センチの大

焰肩仏を手がかりとして（高橋）



(2) 焰肩仏 大きな彫刻の一部（双神変像）
AD3.4世紀（筆者蔵）

大きさの彫刻の一部である。レリーフのまわりはギリシャオリエント風のブドウ唐草模様にかこまれ、多くの楽師が種々の楽器で仏を供養している。その中の二段の彫刻の下の部分がこの写真である。アーカンサスの柱頭をあしらったクシヤン期特有の角柱によって梓付けられた中に、男女の供養者が仏を礼拝している。その仏は肩から大きな火を出し、足元からは水が流れ出ている実に珍しい像である。⁽¹⁾

これらについて経典には「舎衛城の神変」⁽²⁾とあり、又玄奘は大唐西域記に「カニシカ王が大雪山中で悪竜を退治する為両肩から焰を出した」⁽³⁾と記している。又法華経の中にも出ているから、これらと経典等との関連、そして成立の時期場所等に興味もたれる。

[註]

(1) 普通は1の写真の如く火は小さく水も真直ぐ流れているのに2は自由奔放で火も大きく、アフガニスタンのカピシペグラム

出土のものとは比して非常に異っていて、為にこのような形式伝統のうすい地方のものといわれている。又1、2共々岩の質からいってスワット地方に属す。

- IRANIAN BACKGROUND OF THE FLAMING AND WATERING BUDDHA IMAGE IN KUSHAN PERIOD
By K. TANABE THE ANCIENT ORIENT MUSEUM VOL. III. 1981
- (2) DIVYAVADANA XII. DHAMMAPADA—ATTHAKATHA XIV
五分律卷三、四分律卷五一、根本説一切有部毘奈耶雜事卷二六
大唐西域記卷一、迦畢試國 大雪山頂竜池
- (3)



(3) インドグreek (バクトリヤ)
Demetrios (BC190—171) 表

- (4) 法華經妙莊嚴王本事品「身下出火」
水身上出火」

然らばこのような「焰肩」の事例が他にあるだろうかと探しているうち、たまたま当時使用されたコイン上にこれを発見した。従ってコインに「ミント(鑄造)された「焰肩」の推移をまず考えてみよう。

インドグreekの王デメトリオス(2)のコインからはじめよう。象の帽子をかぶったこの王の金貨の裏はギリ

焰肩仏を手がかりとして(高橋)



(3) インドグreek (バクトリヤ)
Demetrios (BC190—171) 裏 Hercules神

シャ風の神像とギリシャ語でヘラクレスと書かれている。所謂ギリシャのコインの伝統に立っているものといえる。

更にサカ・パルタイのコインはこのギリシャの形式をうけついだ。これがクシヤンになると、初代のクジュラ・カドフィーセスは未だギリシャの影響下にあつたが、ソーター・メガースになると変化が出て来た。

即ち王の頭の上に点々と「光芒」が出て来た。^(写真4)(コインの裏は騎馬民族

を象徴するかの如く騎上の王の像)

続いてヴィーマ・カドフィーセスになると、王の頭のまわりの光芒はなくなるかわりに、王の肩に数本の炎が出て来るようになる。⁽⁴⁾(写真5)

に彫られている。然して特筆すべきはこの神の頭上から炎がもえ上っていることだ。⁽⁵⁾(ヴィーマのコインはこの図柄に統一されている)

やがてカニシカ時代になると、王の姿は立像に代るがやはり肩に火をもつ。裏の神々は炎の代りに光背(円光)をもつようになる。(写真6)(但し例外として仏陀のみ頭光と身光を合せた大きな光背となる)、この形式は次の Fuvishka 以後のクシャンコインの基本形式となる。特に立像の王の右手は「Alter」(聖火壇)にかざされ、この火の供養の姿も定型となつて、後述の「火」との関連性を示しているよう思われる。

焰肩仏を手がかりとして(高橋)



(4) kushan 朝
Soter megas (AD55—105)



(5) Kushan 朝 Vima kadphises (AD105—130)
(表) 王の肖像 (裏) Oesho=Śiva 頭から炎



(6) Kanishka (裏) Nanaia——バビロンの自然女神、頭上に三ヶ月

更にフウィジカの時代となるとこの傾向は一層顕著になり、(写真7)の如く王の体全体から炎がもえ上り、且つ又裏の神像の肩は言うに及ばず腕胸等上半身から炎々と燃え上っているのも出る状況である。

然も興味がもてるのはカニシカ時代に裏面の神像の頭だけにあった光背が王の頭の上にもつくようになる。(写真8)即ち神と王と同じ光背がつくということは王が単なる王に止らず、王の神格化が進んで行くことを示す。

更に王が円い光背を持つにあきたらず、裏の神像共々光背の外側にソーターメガスのような「光芒」が作られ、神と王の地位と威力の強大化同一化が進んで行くのが見られる。

かくソーター・メガスにはじまった「光芒」はウィーマの「炎」と結びついてクシヤンの王の力が神との同一性を示すにまで高められて行く。

〔註〕

(1) 經典に焰肩の名の出ているのは「現在賢劫千仏名經」十



(7) Huvishka (AD158—198 (裏) Pharro 王も神も全身に炎

方千五百仏名経」

(2) Demetrios B. C. 190—171.

(3) Soter megas (偉大な救済者)とだけあって、どうしたわけか名前が出ない。Kujila Kadphises と Vima Kadphises との間に Kujila の子 Vashiska だと又 Kujila の副王であったともいわれる。非常に沢山のコインを各地で作った (Michael Mitchiner, Ancient and Classical World 等)

(4) Osho は西方の神ではあるが、インド人はこれをシバ神として信じていた。そばにシバの乗りものの牛ナンデがついてくる。

B. N. MUKHERJEE Kushana Coins……

G. R. SHARMA Kushan studies

(5) ヴィーマ・カドフィース王の時代のコインは火と Oesho で統一されている彼の信仰と対インド民衆への政治姿勢が推量される。前掲ムツケルジー氏より

(6) 次章でとりあげるがヴィーマと違って非常に多くの神々の像が出る The dynamic Art of the Kushan by Rosenfield 参照本文図録

(7) maharajasya rajatira (ja) sya devaputrasya 大王、諸王の王、天子の……

◎ 猶これらのコインは Rosenfield の Dynastic art of kushan を複写した。

焰肩仏を手がかりとして (高橋)



(8) Huvishka (裏) Ashavahista 真理と光の神 王の光背の両側に光芒

ここで私が問題にしたいのはこの光芒や炎がインドグreekやサカ・パルタイのコインにはなく、⁽¹⁾クシヤン期から爆発的に起って来たことだ。即ち前述の如くサカ・パルタイはインドグreekの伝統に従って表はギリシヤ式肖像そして裏はギリシヤ西アジア及びペルシヤの神々が彫られている。

クシヤンになって初代のクジュラカドフィーセスやゾータメガースの時代では未だ未だギリシヤの影響を捨て切れないが、⁽²⁾序々にその独自性を表わして来た。そしてヴィーマ・カドフィーセスを経てカニシカに至ってその特性を顕著にする。それが「光」であり「炎」である。

然らばこれがどこの影響かを考えるのに、実にユニークな例がある。その一つは燃灯仏である。燃灯仏の代表的なものは現在バキスタンのラホール博物館に復元されているマルダン郊外シクリ出土のストゥーパ側面のレリーフである。この燃灯仏には炎はない。⁽⁴⁾然しアフガニスタンの首都カーブル北東方、かつてのクシヤンの都カピシ・ペグラ

ム周辺から出土した燃灯仏は約十一例あるが、これらは皆炎をもっている。⁽⁶⁾これは同じアフガニスタンながら、ガンダーラと同じ文化圏に属したと思われるナガラハラ（現ジュララバード）やその近郊ハツダ出土のものにはこの炎は見えない。

ギリシャ系のコインの像にも炎は見い出されなかったから、考えられることはベルシャの影響がまず考えられねばなるまい。特にクシヤンの文化の本拠は「バクトリヤ」であった為、ここでギリシャやベルシャの文化がミックスされて、バクトリヤ様式が発達して行った。だからそこに根拠を求めねばなるまい。殊にクシヤンのコインは各地でミントされながらも、そのモデルはあくまでも「バクトリヤ」であったこと⁽⁶⁾からして、このバクトリヤの文化がクシヤンの基礎となっていたと推測される。

これを証するものとしてこのバクトリヤの領内、主都バルフに程近い所にスルフコタルのゾロアスターの神殿⁽⁷⁾が最近発掘された。そしてこれがクシヤン民族の風俗習慣の基礎、信仰上からは聖地的役割をになっていたことを示す多数の資料が発掘された。従ってこのスルフコタルに程近いカピシで「焰肩」の仏が多数発見され、又バクトリヤを手本として各地で鑄造されたコインにこの「焰肩」が見られるのは注目すべき問題ではなからうか。

〔註〕

- (1) ミツチエルミツチナー前掲書参照
 - (2) ローゼンフィールド 前掲書参照
 - (3) カニシカは紀元七八年説、一二八年説、一四四年説とがある。
 - (4) 仏教芸術一一七号モタメディ遙子アフガニスタン出土の燃灯仏本生譚の諸遺例
 - (5) 燃灯仏でもガンダーラ出土のものは少ないながらあるが、それは小さく且つ全体のレリーフの一部分の像にすぎない
- 焰肩仏を手がかりとして（高橋）

焔肩仏を手がかりとして(高橋)

く、カピシ周辺のような単独像、所謂主題像と異なる。——仏芸モタモテイ氏

(6) B. N. Mukhejee Kushan Coins of the land of the five river. 及 V¹ michael michiner 前掲書

(7) D. Schlumberger The Excavation at Surkh kotal and the Problems of Hellenism in Bactria and India



然らばゾロアスター教では「光」と「炎」で何を表わそうとしているのだろうか。

アケメネス歴代の王墓ナクシュ・イ・ルスタムの彫刻(前五世紀)の最上段に太陽の「光芒」を思わせるひろげた羽根の上に神がいて「円環」⁽¹⁾リングを王に与えている図や、バサルガダエのキュロス大王就任式、又ダリュース大王の戦勝記念碑、ベルセポリス後方の丘に彫られたアルタクセルクス二世の墓等⁽²⁾マリボンのついた円環⁽¹⁾を神が与えている例は枚挙に遑まない。

時代が下ってサザンベルンシャ隆盛期のアルダシュール一世(後三世紀)の王権神授図⁽³⁾やシャール一世のローマ戦争記念碑⁽⁴⁾になると、王の頭に球状の宝冠をかぶるようになる。

更にアルダシュール二世(後四世紀)の叙任式では右手のアフラマズダ神も又神からリングを渡される王も共に球状の宝冠をかぶり、左手のミトラ神はその頭に太陽の光芒を思わせる光背⁽⁵⁾をもっている。即ち右手のアフラマズダ神の球状の宝冠とミトラ神の太陽の光芒は共に同じものを意味していると考えられるから、この球状の宝冠こそ太陽の光、否太陽の光で表わされる神そのものの威力地位と考えられるに至る。かくして神と又神からリングを与えられた王は神と同じ地位と力をもつようになると思はれていたことが分る。

この太陽と対象的なのが「火」である。ダリュース大王の墓で中央がリングをもつ有翼の神、左が大王自身、そし

て右手に炎々と燃える拜火壇⁽⁶⁾。王はこの聖なる火をたいて神から王たる資格のリングをもらう彫刻がある。この拜火壇の火は天上の無量光の地上的表現である。唯ここで注意すべきことは「光」や「炎」が問題ではなく、「光」で表現される「フファルナフ」⁽⁷⁾が問題である。フファルナフとは神を神たらしめるその本質のことである。この思考方法は大乗仏教の仏の考え方との対比に於て特に注目されねばならぬ。この「フファルナフ」を自分のものとする為に火をたいて祈る。然も王は自分の為ばかりではなく、国民の生活を豊かならしめる義務がある。特に乾燥地帯ではオワシスはもとより遊牧の人達にとつて降雨が如何に渴望されるかは想像に難くないからである⁽⁸⁾。

例えば、ベルセポリスの宮殿内に彫られた「帝王と怪獣の斗争図」は新年の大祭に於ける帝王の役割りの一つで、大地の豊穰、即ち農牧民の保護安寧を祈願した行事の一表現であった。これはイランに止らず、もともとは古代メソポタミヤの伝統でもあった。あの円筒印章に彫られた「帝王と怪獣の斗争」⁽¹⁰⁾がこれを如実に物語っている。帝王とは神の一表現たる太陽の光を、その地上的シンボルたる拜火壇の火によって体得し、国民の生命の綱たる水を支配する力と義務をもつものであり、その力を失ったものは退位すべきものと考えられていた。

これを裏付けるものとしてササンの王 *péroz* (AD457—483) の伝説がある。

「ペローズの時代に雨が降らなくなった。彼は有名な ADUR-KYVARRA の火の寺に行き祈った。……火の祭壇に登り……『神よあなたの御名が祝福されますように。雨の降らないのが、私の犯した罪の為にしたら私に身を引かせて下さい。もし私の罪でなく人の罪でしたら私に雨を与えて下さい』と祈った。そしてペローズが願いの村に着いた時、雲がさけ、今まで見たこともないような多くの雨が降った。」⁽¹¹⁾と。

かくベルシャの王はアフラマツダの無量光「フファルナフ」を自己の中にもち、神と同じ力をもつものと考えられ

焰肩仏を手がかりとして(高橋)

焰肩仏を手がかりとして（高橋）

て来た。従って王が生れる時、火や雷光が母体に入ると信じられた。即ちゾロアスターが生れる時フファルナフが入胎し⁽¹²⁾、ミトラデスエウパター⁽¹³⁾（ポンティアック王国前一二五—一六〇）の生れる時はコメットが七十日間続き、彼の誕生を示し、雷光がゆりかごに落ち、彼を傷つけることなく額に跡を残した。或はササン朝のアルダシール一世の誕生の時もゾロアスターの三つの光がこれ⁽¹⁴⁾を予言したと。このようにベルシャの古代世界には救世者や王が生れる時必ず不思議な現象が起るとされた。これがフファルナフの考え方だ。このフファルナフを象徴するものとして光のリングや球状の宝冠が考えられた。これがあるものは神であり神と同じ威力をもつものと考えられた。

然しクシヤンではもつと単純に炎と光背でこれを表すようになった。王はこの光や炎に象徴されるフファルナフによって人民の渴を医やし、牧草を豊かにする雨をもたらすものと信ぜられた。クシヤンのコインに随所に出て来るclubやmaceはインドグリークの時代から使われているヘレニスティックな神、ヘラクレスのクラブであるが同時にインドの神インドラ（雷の神）のそれとも考えられ三叉⁽¹⁵⁾の矛がクシヤンのシンボルとなる程使われていた。これは言うまでもなく災を去り民を幸福にする雨をもたらすものと考えられたからだ。

前述のカニシカ一世が暴竜を退治したのはベルシャの正月の行事「ドラゴンスレイヤー」のつとって農牧民に雨水を恵む義務を果たしたベルシャ的王権の象徴と考えられる。従って仏陀の足から水の流れ出ていることは洪水を調整し恵みの雨を降らせると言う王の理想が仏陀と同一化、即ち王の理想を仏に見くらべダブラせたからに外ならない。

ここに来ると仏は今までの生身の仏ではなく、超人化超能力化の方向に進んで行くことが分る。従ってこの焰肩の仏は又仏陀観の変遷をも示しているといえよう。原始小乗の仏身観から、生身の仏陀を仏陀たらしめる久遠の生命、救済者としての超越化の方向に進んで行ったことを示す。これはベルシャの神を神たらしめるフファルナフという考

えと対応し、いよいよ大乘仏教の思想形成に向わせるのである。この一つの象徴が炎と水であったと思う。

あのモタメデイ逸子氏の研究のようにこれらの仏像がカピシ周辺に限られていたことは、クシヤンの文化的根源があくまでバクトリヤであったし又そのバクトリヤにゾロアスターの神殿スルフコタルが位置しカピシとは指呼の間であつたことなでから、このペルシヤ的思考が伝わった為であろう。よしんば一步退いてオーソドックスなゾロアスター教でなくとも、ペルシヤにひろがっていた「光と火と水」の民間信仰がこれに影響していることは間違いないものと信ずる。

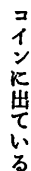
〔註〕

- (1) Nagsh—Rustam B. C. Se 譚談社オリエントの廃墟二二二頁
 - (2) 前四世紀 譚談社 前掲書九六頁
 - (3) 後三世紀 譚談社 前掲書一二六頁
 - (4) 後三世紀 Nagsh—Rustam 前掲書二二二頁
 - (5) 東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書13ターク・イ・プースタンⅡ図版 PL.LXXIV
 - (6) オリエントの廃墟二二二、九六頁参照
 - (7) 伊藤義教氏ゾロアスター研究8、仏光とイランの要素、田辺勝巳氏ターク・イ・プースタン大洞彫刻研究八三頁
 - (8) フフルナフと水との関係については前掲伊藤氏の8に詳述
 - (9) 田辺氏前掲書八八頁及び英文論文(前掲)七九頁
 - (10) 筆者コレクション
 - (11) 田辺英文論文七五頁及び G. Widengren, La légende royale de l'Iran antique, Hommage a George Dumézil 1960.
 - (12) 田辺氏英文論文七四頁及び G. Widengren の前掲書
 - (13) 田辺氏同論文七四頁及び Widengren 同書
- 焰眉仏を手がかりとして(高橋)

焰肩仏を手がかりとして(高橋)

(14) 田辺氏同論文「ササンの頭から太陽が輝き世界全体を照した。そして白い飾りたてた象にササンが乗っていたように感じた。住民は総立ちしてササンをほめたたえた。そして三つの光がササンの館でもえるのが見えた。

即ち Farnbag (偉人達の信仰と知輝の光) Gunāsp (兵士と軍隊の光) Burzēnmihr (農民と働くもの光) がクシヤンのシンボルとなる。

(15) コインに出ている  一番上のホコがやがて下のシンボルに

(16) 11の伝説内容参照



更にこの「炎」のベルシヤ的思考を裏付けるものとしてコインにミントされた神々を考えよう。

別表のカニシカ、フヴィジカ時代に流布したコインの表を参照されたい。当時四十種に近いコインがヒンドウークシユの北からガンダーラ・マトゥーラー辺までひろがっていた。正面は王の肖像、そして裏面はもろもろの神々が彫られ恰もクシヤンのパンティオンを呈する。⁽²⁾

然してここにユニークな法則が示されている。それは(一)のギリシヤ及び西アジアと(二)のベルシヤの神々が圧倒的に多く、(三)のインドのものは Oesto を除いて極めて少ない。

更に同一の神のものであっても、そのコインの種類が多いものに◎印をつけてみた。即ち MIRO (太陽) FAR RO (火) MAO (月) NANA (水) が一番多い。特に NANA は nanaita, nanasho, shonana 等々種類も数もきわだつて多く、人々から親しまれた神である。nana は西アジアで信仰された地母神大地の神豊穰の神として何千年となく信仰されて来た神だが、その神が沙漠に適時な雨を降らせて牧草を育て洪水を守る神としてベルシヤで一番親しまれた Anahita と合してイラン信仰の主神となつた。⁽⁴⁾

こうして見て来るとこの表では太陽の「光」と「火」と「水」という特徴が読みとれ、前項の焰肩の問題と密接に結びついて、前述のヘルシヤ的思考を思わせる。⁽⁵⁾

然もカニシカフヴァシカのコインがかくギリシヤ、西アジャそしてヘルシヤ、インドと当時の全世界の神々を網羅したコイン体系を持ったということはクシヤンの世界が実に普遍的な世界であったことを示し、この精神的基盤の上に大乘仏教が成立して行ったことは注意されていいのではなからうか。

【註】

(一) クシヤンのミンテヤオン (コインに mint を入れた神々)

1. キリシヤ・西アジャ系

EPHAISTOS (ΦΑΙΣΤΟΣ) Athosho と合して火の神

ERAKILO (HPAKILO) < ラキルス > そのものの神又死の神、太陽神

◎NANA (NANA) イナンナ・イシタル・大地母神、西アジャから東に一番信仰された神。

クシヤンのコインの主神、水の神 *anabita* と結ぶ

NANAIA (NANAIA)

SHAONAN (PAONAN)

NANASHAO (NANAPAO)

SELENE (CAHNIH) MAO (月) の仲間 } NANA の変形

SARAPU (CAPARU) ナンニエギンナ、アレキントリヤの神。下界の神

RISHNO, RION (PIAH) ローヤタインの神

HELIOS (HAIOC) 太陽神 *miro* と合す、インドではクハミラで比定

2. イラン系

ARDOXSHO (APPOXPO) マンメタの神・マンラマズダの娘。インドグリークヤサカでコイ

ンで出む。富と充足の神。Anabita ラクシエミーと連る。

焰肩仏を手がかりとして (高橋)

	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カニシカ、	○	○	○	○	○	○	○	○	○
フヴィジカ	○	○	○	○	○	○	○	○	○

SKANDO—KOMARO (MAASENA) —BIZAGO (SKANDAO—KOMARO—BIZOTO)

シン神の子、シン神の力の一表現

SHAORERO (PAOPHOPO) Vedaの神、金属の神……一番ポピュラーな神

B. N. Mukherjee kushāna coins of the land of the tve river

Rosenfield Dynastic Art of kushan

M. mitchner. the ancient and classical World

Cunnigham. coins of the kushans or great yue-ti

上記四書より「表」を作った。

(2) Rosenfield 前掲書六九頁—一〇三頁

(3) B. N. Mukherjee, nana on lion による anahita との関係を詳述している。

(5) Nana Mitro Pharro, Mao がさばぬけて多量との統計は紙数の都合上詳述出来なかった。(B. N. mukherjee 氏の nana on lion を参照) 更に上の四つ以外に Oesho も多いが、この問題については改めて書きたらう。

結

以上焔肩仏を手がかりとしてコインから神話考古学等手をひろげてみて来たが、要は大乗仏教の成立した頃の思想的基盤は唯単に釈尊の仏教というインドの伝統の枠を外れて、ギリシャから西アジア、特にペルシャの思想的影響は見逃せない程大きいことを主張したい。勿もガンダーラからアフガニスタンのクシヤンの領域は釈尊時代からアケメネスペルシャの一州で、その兵はギリシャのオリンピックポスの戦にペルシャ軍に加わっていたことから分ろう。これをアショカ王が一時追い返したが、すぐアレキサンダーの侵入にあい、セレウコス王朝、これから独立したインドグリークのバクトリヤ、そしてペルシャ系のサカ・バルタイを経てクシヤンの統治に至る。ほとんど外来民族の支配にまかされて来た所である。当然これらからの影響は考えられる筈である。従ってこれらの西方の文化がいろいろの

焔肩仏を手がかりとして (高橋)

焰肩仏を手がかりとして（齒橋）

形で然も相当程度に大乘仏教の中に反映しているのではなからうかと私は考える。

その一つの手がかり、典型がこの焰肩仏であり、いわば「焰肩仏」・「双神変」はこの東西文化交流の結晶の一表現であるとも言えよう。